

葉集を読む

松岡 隆子

ほうたるの夜や森の音水の音

宮崎美智子

蛍を見にゆく。ようやく闇が深くなってきた。森の木々の微かな葉擦れの音、闇の底を流れる水の音、蛍を待つて静かな時間が流れる。つーつと蛍火が流れて来た。一つ、また一つ、しだいに数が増えてくる。人々のひそやかな話し声がする。(森の音水の音)に蛍の夜の情感が滲む。繊細な感性が捉えた音である。

寂光をまとひて朴の花高し

醍醐喜美枝

落葉高木の朴はその高い枝先に広がる大きな葉の上に白い大輪の花を咲かせる。淡い日差しにさ揺らぐ花の姿は天上の花のようだ。作者はその日差しは寂光浄土の光だという。孤高の朴の花を格調高く詠んでいて印象深い。

月山の雪溪美しき小窓かな

矢作 裕子

若葉が輝き郭公が鳴きだす夏の初めは、月山の雪溪が最も美しい時だ。上五中七はありふれた措辞だが(小窓かな)で作者自身の句になっている。日々月山を仰ぎながら移りゆく季節の一日一日を丁寧に慎ましやかに暮らす作者の姿が思われる。生活に根差した自然体の作句姿勢は好感が持てる。因みに初めて雪溪を間近に見たときは、遠目には想像もつかない荒々しさに圧倒された。矢作さんに案内してもらった月山の雪溪だった。

からくりのあるやも知れぬ蜘蛛の糸 国盛 千春

蜘蛛は益虫であるとはいえ、そのグロテスクな姿は敬遠されがちだ。だが蜘蛛が作る巣の精巧さには感心させられる。古びてくると汚らしくなるが、張られたばかりの網が朝露や光に輝く様は実に美しい。繊細で触れると壊れそうに見える網だが、昆虫を捕食するための強靱な罫なのである。網に掛かった昆虫はもがくほどに糸が絡まって絶体絶命となる。あの緻密な蜘蛛の網にどんな仕掛けがあるのだろうか。国盛さんは不思議に思っている。実際は蜘蛛の糸の粘着性によるのだが、網のどこかからくりがあるような気がしてくる。

さくらんぼ程よき距離に吾子の家 河本 順

核家族時代になって久しいが、最近は二所帯住宅に住むケースや近距離に住み合うケースが増えてきているようだ。程よい距離を保ちながらお互いを思いやって暮らすことは円